

千葉雅也／咲くやこの花インタビューvol.42

千葉雅也(ちば・まさや)【令和5年度 文芸その他部門 [小説】】



作家として10年、すべての作品は大阪で生まれた

2023年に発表した小説『エレクトリック』が三島由紀夫賞と芥川賞にダブルでノミネートされ、哲学者としては『現代思想入門』で「新書大賞 2023」を受賞するなど、多彩な活動を展開している千葉雅也さん。1978年に栃木県に生まれた千葉さんは現在、立命館大学大学院先端総合学術研究科で教壇に立ち、「これまで何の縁もなかった」という大阪に10年、在住されています。

「哲学の学術分野で既に名の知れた存在ではあるが、小説家としても時代の描写やマイノリティーの視点、同性愛をテーマに、思索的、哲学的な筆致でリアルな生を描いた作品が高く評価されている。大阪が舞台の作品も執筆するなど、大阪の文化の発信に大いに寄与するものと期待される」という受賞理由にあるように、小説『オーバーヒート』は2018年の大阪が主な舞台になっています。千葉さんの目に大阪はどのように映っているのでしょうか。まずはそこからお聞きました。

取材・文／岩本和子

「大阪は、実は大きな存在」

「咲くやこの花賞」受賞おめでとうございます。受賞のご感想を教えてください。

「咲くやこの花賞」をいただいた 2023 年は、僕が大阪に来てほぼ 10 周年の年でした。2012 年の後半に関西に引っ越してきたので、正確には 11 年目になるのですが。初の単著である『動きすぎてはいけない ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』の出版が 2013 年。ここから執筆活動が始まったので、僕はこれまでのすべての本を大阪で書いたわけです。大阪とまったく縁がない人間でしたので、まさかそんなことになるとは思わなかったし、そういう意味においても実は大阪は大きな存在です。



大阪という街の印象はいかがでしょうか。

新聞のインタビューなどでも「いい意味で街に紛れて暮らせる、放っておいてもらえる場所」と答えているのですが、僕にとって東京は自己形成をしてきた場所で、京都は仕事の知り合いが多い場所なんですね。それもあって、大阪はさらっと生きることができる場所です。基本的には、歴史をよく知らない僕には、大阪文化の深みを語る資格はないと思っています。それでも大阪で活動する人間として「咲くやこの花賞」という賞で認めてくださったことは、いわゆる「よそもの」にとって非常に名誉なことだと思っています。

ちなみに大阪弁は何か口をついて出たりしますか？

そんなに出ないですけど、「なんやねん」とかは言っているかもしれません(笑)。

小説『エレクトリック』にも関東の人が抱く大阪への距離感などが書かれていて、それがとても興味深かったです。

端的に言って、関東に住んでいる人は関東が日本だと思っていますから(笑)。まあ、それは冗談ですが、僕にとって大阪に来たという経験はものすごく大きなことで、関西を見ないで日本は語れないなとつくづく思いました。

たとえば大阪の食文化で、カルチャーショックとか、ギャップなどありましたか？

大阪は何を食べてもすごくおいしいですね。特に和食。京都もそうですが、大阪も小料理屋さんみたいなお店でリーズナブルだけど凝った和食を食べられます。良い和食が東京よりはるかに手に届きやすい街だと思います。東京で大阪と同じクオリティの和食を食べようと思ったら、まず渋谷とかでは無理で、もっと高級店の多いエリアに行かないと、そういうお店はありません。

あと、大阪に来て認識した食べ物も結構ありました。たとえば鶏肉の天ぷら。関東にいたとき、「鶏肉を天ぷらにする」という発想は聞いたことがなかった。しかも、関西の人はいろいろなものを天ぷらにしますよね。牡蠣の天ぷらも大阪で初めて食べました。大阪では手ごろな小料理屋で出ますから。これが大阪の豊かさだと思います。大阪に来て食生活が充実したように思いますよ。



「生活に哲学を」その真意とは

『現代思想入門』など千葉さんのご本についてもお聞きしたいのですが、千葉さんが『現代思想入門』で伝えたいことは、「哲学が自分の生活の近くにある」いうことなののでしょうか？ 正直申し上げますと、私は読めば読むほど混乱してしまいました…。

「生活に哲学を」と言うとき、たとえばジャック・デリダ(1930～2004 年／フランスの哲学者)だと「脱構築」とか、哲学っぽい言葉があるじゃないですか。それを日常会話の中で使ってください、なんていうことは言っていません。

『現代思想入門』に「二項対立」というキーワードが出てきます。「二項対立」と聞くと難しい響きがある

ようにも思えますが、そんなに難しいことは言っていないで、「右と左」「善と悪」「田舎と都会」といったペアのことを「二項対立」と言うんです。そして、何か二項対立があるときに、「どちらを取るのか」という話では済まないですよというのが、すごくラフに言えば「脱構築」という考え方です。対立関係の間には、互いにもたれかかるような微妙で複雑なものがあって、割り切れないこともいっぱいありますよねと、大まかにはそういうことを説明しています。

たとえば、昨今のネットの議論などを見ると、すぐに「どちらを取るか」という話になります。しかも、昔は他人が社会に対してどう考えているのか、特に仕事関係の人の考えなど知らなくてよかったわけです。知ってしまうと仕事の付き合いが多少難しくなるかもしれない。たとえば、X(旧ツイッター)で、仕事で知り合った人と名刺交換のような感覚で気軽にフォローをしてしまう。そうすると、その人が何を発言して、何をリポストしているのかが見えてしまい、「この人はこういう考えなんだな」とか、「これには反対なんだな」ということまでわかってしまう。



「お天気の話をするのが無難」とよく聞かと思いますが、それは昔の人の知恵なんですね。何でもかんでもオープンに議論すればいいというわけではない。もちろん議論が必要なこともあります。でも、人生に対する態度が根本的に違う人は世の中にたくさんいますから、話し合ったからといってみんなが同じ方を向くなんてことはまずあり得ません。生き方が違うのだから。そこをごまかして、「まあまあまあ」というふうにやり過ごすのが「社交」というものだとは僕は思っています。

ところが、今日の「みんなで話し合った方がいい」という一見、反論しにくい方向性は、異質な人たちが共に生きていくための社交空間を壊してしまう。それが問題だと僕は思っています。

『現代思想入門』で「脱構築」というデリダの考えを紹介しているのも、そういった対立がむき出しになっているような世界に対して、もっと曖昧に物事を遊ばせておくような、ハンドルの「遊び」みたいな意味で、そういう余裕のある空間が大事だろうと思っているからです。そのようなことが『現代思想入門』から伝わればいいなと思っています。

また、曖昧という観点でいうと、大阪の街のごちゃごちゃぶりには、いろんな意味で「ええやん」と受け流しているところがあると思いますね。東京のような、なんでもパキパキと決めていくものではなくて。東京も昔はそうじゃなくて、ゆるかったところもあったのですが、どんどんクリーン化しています。大阪にはそんな昔ながらのゆるさがまだ多少なりとも残っているところがあると思いますし、少なくとも僕が大阪に来た10年前にはありました。

確かに、大阪は良い意味で「いい加減」なところがありますね。

それはあると思いますね。



先ほどのSNSですが、最近はSNSで相手の知らなくてもいいことまで知ってしまいますよね。相手を理解することと、相手がどう思っているか知ることは、全く異なるものなんだと最近になって思うようになりました。知りすぎてしまったがゆえの対立や摩擦もありますね。

そう、相手を理解するということと、相手の考えていることを知ることは、必ずしもイコールじゃないんですよ。それは不思議なもので。

「芸術」と「時間」を考える日々

今、千葉さんは何に興味をお持ちですか？

『デッドライン』という作品で小説家デビューして、もう5年になります。本を書いてきた10年のうちの半分は小説家としてのキャリアだということに改めてびっくりしているのですが、今はその10年の区切りという意味合いも込めた芸術論の本を書いています。2023年度、大学は、学外研究という制

度で 1 年間学務の休みをいただいています。そのなかで、自分のこれからの時間のことも考えています。だから、何に興味があるかというと、「芸術」と「時間」です。

時間については、「時間を取る」ということもそうですが、「効率化」もありますし、いろんなものがネット上で情報化されることで歴史がなくなってしまうことを懸念しています。昔のものと今のものとを同じ平面の上に並べてしまうことによって、崩れてしまうものがありますから。

大阪も今、どんどん新しいものを作って、東京みたいにきれいにして、良くないとされる昔のものをなくしていく方向にあるように見えます。そこに抵抗感を抱いている市民も多いのではないのでしょうか。

東京もどんどん書き換えられています。たとえば、渋谷は僕にとって小さい頃からの憧れの街で、80年代の渋谷にはいわゆる“セゾンカルチャー”がありました。それがゼロ年代まではある程度続いていたのですが、今は相当変わりました。この間に全国各地で大きな震災もありましたし、自分が知る 90年代、2000年代までの日本がいよいよ本格的に変わってきているということを目の当たりにしながら、時間や歴史について考えています。『エレクトリック』もそういう小説です。



では、千葉さんにとってファッションとは何なのか、そこもお聞きしてよいでしょうか。

何を着るか、何を食べるかというのも表現だと思います。生活というものは多面的な作品ですから。生活と芸術を僕はつなげて考えています。

いわゆる大阪のおばちゃんの豹柄ファッションも表現ですね。

傾向で言うと、大阪の方が東京より派手というか、なんていうのかな、太い。太いですね。僕の感覚からすると、いろんなものが太い。ファッションに限らず、生き方、人のあり方とか。東京はかなり繊細に

組み立てられていて、そこが良さでもあるのですが、大阪はもっと太い。そこが大阪のいいところかなと思います。

では最後に、千葉さんが大阪市に「咲くやこの花賞」を贈るとしたら、何に贈りますか？

大らかさですね。時間の感覚が大らかだと思う。世界的に知られる大都市なのに、独特な大らかさがあって、そして先ほども言ったように太い。それはどこか外国に近い感じがします。